

2024 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	ポストコロナ時代における公教育の新たな可能性の探究 ーカナダ・アルバータ州オルタナティブプログラムに着目してー
キーワード	①包括支援、②オルタナティブ教育、③ホームスクーリング

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	マツモト マミ 松本 麻美
配付時の所属先・職位等 (令和6年4月1日現在)	名古屋国際工科専門職大学 工科学部・助教
現在の所属先・職位等	名古屋国際工科専門職大学 工科学部・助教
プロフィール	英語コミュニケーション授業担当。1年生クラス担任及び1年生担任会議議長。修士課程はカナダのトリニティウェスタン大学で、外国語話者のための英語教授法 MATESOL 修士号を取得。帰国後、本学で勤務の傍ら名古屋大学大学院教育発達科学研究科に在籍し、博士後期課程単位取得。研究テーマ「カナダのホームスクーリング」には修士課程在籍中に会う。不登校児童生徒が過去最多を更新し続けている日本の学校教育制度に示唆が得られることを期待し、博士号取得を目指す。40代での子連れカナダ大学院留学からの大学教員への転職で、研究者としてのキャリアは浅いものの、一般企業や子育て経験を活かし、授業、学生指導、研究を楽しむ毎日。

1. 研究の概要

最も表現力の高いビジネスモデル表記法である ArchiMate^[1]は、教育現場の事例分析に活用できるであろうか？鈴木(2022)^[2]は、科学システムとしての教育学について、以下のよう
に述べる。長らく、教育学は教育システムに対する「反省の審級」として理解され、科学の
生み出した理論を実践に適用するという図式のもとで理解されてきたが、理論社会学者
Niklas Luhman (ニコラス・ルーマン)^[3]の社会システム論を踏まえると、科学システムと教
育システムとは異なる機能システムに属し、それぞれに独自の歴史を積み重ねているもの
であり、前者が生み出した理論を後者が応用するという単純な関係を想定することは困難で
ある。なぜなら、あらゆる活動を、真/非真の二値コードに照らして判断する科学システムに
対し、教育システムはあらゆる活動を、より良い/より劣るというコードに基づいて判断する
ためである(p. 78)^[4]。

本研究では、ArchiMate を活用してカナダ・ブリティッシュコロンビア州（以下 BC 州）の
家庭教育システムを検証し、その特徴と課題を新たに明らかにした。具体的には、BC 州に
おける K-12 オンライン学習プログラム（以下 OL）とホームスクーリング(以下 HS)の違いを説
明した後、EA モデリング言語 ArchiMate を用いて、CATWOE 分析^[5]を使って、それぞれの教育
システムを表現した。ArchiMate を用いて HS と OL の共通点を簡潔な図で可視化することで、
両者の共通点を明らかにし、HS と OL が学生視点で統合可能であることを指摘した。また、
所有者、教員、学生、世界観からなる一般教育機能を ArchiMate で抽出したことにより、従
来は必ずしも明確ではなかった課題として、教育上の世界観の対立とその影響を受ける学生

及び教員が遵守すべき行動原則の対立を抽出した。

2. 研究の動機、目的

ビジネスモデル表記法として最も高い表現能力を有する ArchiMate にて教育学領域の事例分析ができるか？ArchiMate を用いて BC 州の 2 つの在宅教育制度（ホームスクーリングと K-12 オンラインプログラム）について検証し、その特徴を明らかにし、課題と 2 つの統合可能性を示す。

3. 研究の結果

①ArchiMate を用いて、HS と K-12 OL プログラムの共通点を簡潔な図で可視化することで、両者の共通点を明らかにし、統合可能であることを指摘した。

②ArchiMate を用いて、オーナー、教師、生徒、世界観といった一般的な教育機能を抽出できた。

①②の結果を分析することにより、

③家庭の価値観と公的教育の価値観の対立が発生する可能性と、それが教育を受ける当事者である生徒に与える影響として「原則の対立」という新たな課題を発見した。

④③の対立によって、これまで必ずしも明確でなかった教師や生徒が守らなければならない行動を明らかにすることができた。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究は、教育学分野をシステム思考で分析する、これまでにない試みであった。今回は、アルバータの調査が難しかったため、ブリティッシュコロンビア州について分析をしたが、この研究は単年度で終わるものではないため、引き続き、アルバータ州やトロントのあるオンタリオ州について調査を実施し、同様に在宅教育制度について ArchiMate を用いた分析を行いたい。

また、本年度は、他国のホームスクूलを研究している先生と一緒に WCCES（世界比較教育学会）の第 16 回大会にて発表する機会も得られた。ホームスクूलを通して共通の基盤形成について探る研究であったが、こちらで得られたデータを元に、システム思考を使用し、他のホームスクूल研究の先生を巻き込んで、多面的に分析する試みにも挑戦したいと考える。



5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は、私の研究へご支援をいただきまして、誠にありがとうございました。上述の WCCES（世界比較教育学会）は、私が所属している日本比較教育学会の世界学会にあたります。WCCES は、3 年に一度の開催で、ちょうど本年度が開催年であったため、奨励金を使用して参加が叶いました。当学会は NY で開催されましたが、最近の円安ドル高、また、物価高の影響で、北米へ行くのは旅費が高額になるため、北米を研究フィールドにしている私にはつらい状況です。奨励金を得られていなければ、学会参加は見送らざるを得なかったと思います。WCCES では、他国の比較教育学を行う研究者たちと交流し、有意義な時間を過ごせましたし、英語での発表を成功させられたことにより、大きな自信につながりました。また、WCCES での経験が得られたからこそ、本研究で INTED2025（スペインのバレンシアで開催）で発表、論文等投稿に自信をもって踏み切ることができました。おかげさまで、本年度は、研究者として実り多き一年となりました。引き続き、博士号取得に向けて邁進していく所存です。ありがとうございました。